

「荻窪の記憶」 こぼればなし

いたずら 悪戯っ子の天国

「荻窪の記憶」プロジェクトでは、発足以来、荻窪の昔を知る多くの方からお話を聞きしてきました。その最初の一人が、大正10年生まれで当時96歳、家業の自転車屋を営んでこられた万田勇さんでした。「昔話をすると元気が出てきちゃう」というその回想は多岐にわたりましたが、今回は、「悪戯っ子の天国」だったという荻窪にご案内しましょう。

ちなみに、万田さんが両親とともに新宿の淀橋から荻窪に引っ越ししてきたのは昭和3年。荻窪は農村から住宅地へと変わりはじめていたものの、まだまだ豊かな自然が残る「悪戯っ子の天国」だったといいます。「親戚の子がくると羨ましがるのよ」という「天国」の中心は何といっても善福寺川。「川の周りは田んぼ。ちょっと掘れば水が湧くから、魚は豊富だしね。田んぼに水引くんで堰があんじょ。堰は、子供の背が立つか立たないかの深さで、プールがないから、水遊びにはちょうどいい」というわけです。

子供たちは、どこに行けば、どんな魚が獲れるのか、精通していました。「近衛さんのところ、うろになってるところで、フナが手づかみでとれるのよ」「本村庵のあたり、水がきれいなところで、いまは北海道か四万十川にしかいないような巣をつくる淡水魚（トゲウオのこと）も、この辺に一杯いたですよ」「弁天池、この辺は何度も行った。蛇をとる、蛙をとる。あの辺から阿佐ヶ谷にかけては、赤貝とって皮剥いて食べたり、楽しいところだったな」。

冒険にはおあつらえむきの洞窟もありました。「アンサンブル（現在の荻窪税務署）の奥にね、大きな洞窟があったですよ。信仰の洞でしょうけどね、入ると怒られるんだけど、ローソクをもって入っていった」「三丁目の川の淵にも洞があったですよ。あの辺の畑に矢じりがたくさん落ちていた」。石の矢じりは繩文時代に集落があった証し。昆虫の世界も身近でした。

「宇田川さんの屋敷（かつて東信閣があったあたり）の一画なんて林で、朝早く行けばカブト虫がいくらでもとれた。白山神社はあったけど、宮司がいないしさ。悪戯っ子の



昭和初期の上荻窪。善福寺川と一両編成の中央線の電車が見える（「宇田川家のアルバム」より）

遊び場だった。床下に入って、アリ取り（アリ地獄）を見たり」。

遊び場は町の中にもありました。現在のりそな銀行のあたりはずっと野原で、よく見世物小屋が建ったそうです。「いたずらっ子の傑作なのはね。よく見世物がかかるでしょ。テントの間から割り込んで入ると、コラッって怒られるでしょ。お尻から入っていくと、出ちゃだめだって押し込まれちゃう」。

天沼教会も子供たちにとっては遊び場でした。教会の周りがコンクリートで舗装されていたので、ローラースケートができるのです。そんな悪戯っ子たちも、毎年、11月ごろになると、日曜学校に通いだしました。「クリスマスにプレゼントをもらうため」でした。

万田さんが通っていた杉並第五小学校では野球も盛んで、昭和4年には東京少年野球大会で優勝しています。野球に熱心だったのは農家や商店よりもサラリーマンの子弟だったそうで、都市化の進展とともに、子供たちの世界も変わりつつあったようです。